慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	生存権と自殺権
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.1 (1921. 1) ,p.138- 146
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210101-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を以て中世ギルドがローマに起源を發するといふことは出來ない。何故なればこの兩者の間に繼續的な關係を證據立てるものはないからである。それ故に同じ必要により同じ狀態に於て發生したる兩制度が類似してゐるといふ事實より外には、推斷することが出來ないものである。然かも各民族によつてそれぞれ相異した風俗習慣が多くギルドの形式に影響してゐることは爭ふべからざることである。前に擧げたゲルマニーの組合の如きはその最も著しい例である。

尙ギルドの起源に關して論ずべき項目は多くあるかも知れない。然し乍ら玆では自分は特にその成立とローマの組合との比較を行ふことだけを以て滿足し、ギルドの各國に於ける發達及び各種類のギルドに就いては特に何等の論述を試みない。

（大正十年十二月十七日稿）

生存權と自殺權

高橋誠一郎

一

吾人が自己の生存を維持するの權利は、又たこれを滅絕せしむるの權利を包含することなきや。若し吾人が吾人自身の生命に對して有する權利にして、吾人が吾人自身の財產に對して有する權利より類推し得可しとせば、當さにこれを保持するの權利は、これと對應して、それを破壞するの權利を包含するものと論ずるを得可し。

遮莫、生命の破壞は凡ゆる一切の權利を廢滅せしむるが故に、個人的權利の觀念其の者と相容れず、從つて又た其一として觀ること能はずと主張するを得可し。蓋し個人の諸權利は總べて生命を保持するの本原的權利に其の基礎を有すればなり。

若し又た他方に於て、自己保存は一の社會的義務なりと看做さる可きものとせば、猶ほ、社會に取りて最早何等の效用を有することなき生命は正當に之れを奪ふを得可きものなりや否や、若し果して然らば、當該個人は自ら之れを奪ふの權利を有すと稱し得可きや否やの問題を生ずるなる可し。

然れども、社會的見地より觀る時は、之れに對して裁斷を與ふ可きものは、當該個人に非ずして、彼れの屬する社會たらざるを得ざること明かなり。其の生存を以て自己に取りては一の勞苦なりと感ずる人々と雖も、猶ほ一定の社會的勤務を給付するの能力あることある可し。而して、彼れ等にして若し斯くの如き勤務の給付に從事せんが、恐らくは其の生存を以て勞苦と感ずること少なかる可きと同時に、何等の社會的效用を有することなく、又た、事實、他人に對して負擔を課しつゝある者が、自己を除去せんとせざる場合ある可し。

洵に自殺に關する意見は時代を異にするに從ひて、又た頗る區々たるものにして、安住の地を死に求めんとするの傾向は相異れる人種の間に於て著しく相違せるものあるなり。（Ritchie, Natural Rights, 1895, pp. 124-5.）。

二

靈魂の不滅を說きて、從容、死に就けるソクラチーズが最後の日の對話を敘せるプラトーンの「フイドー」（*Phaidon*）は早く既に這般の問題を取扱へり。生活の全部は死に對するの準備、有體的存在は靈魂の禁獄、身體の欲求は悉く純正なる知識に對する障害、而して死に對する憧憬は賢人に取りて自然にして又た適當なる心的狀

態なりと說けるソクラチーズはゼーベの青年 Cebes が「然らば何が故に輿論は自殺を許す可らずと做すや」の問に對して、「神々は吾人を加護し、而して吾人人類は彼れ等の所有産の一なり」、「從つて、若し汝が奴隸の一にして、汝が彼れを死に着かしむるを欲する旨を暗示せざるに、自殺せんとせば、恐らく汝は彼れに對して憤激し、而して若し與ふ可くんば彼れを所罰せんとするなる可し」。「然らば、宛も今の余に對するが如く、神が或る人を必然自殺するの已むなき狀態の下に置くの前に、彼れは之れを行ふ可きものに非ずと主張するは恐らく不條理に非ざる可し」と。(Phædo, 16.)。

アリストーテリーズ亦た其の「倫理學」第三編第七章に於て、勇氣の性質を論ずるに當り、自殺に言及して曰く、死して貧窮、愛欲若しくは總ての苦痛を免れんとするは勇敢なる人の爲す可き行爲に非ずして、寧ろ卑怯なる者に屬す、即ち勞苦を回避するは怯懦なるを以てなり。而して自殺は死が名譽なるが故に、之れを敢するに非ずして、害惡を避くるが爲めに之れを行ふものなりと。(Eth. Nic. III, vii, § 11.)。

III

キレーネ學派に從くば、人生(τέλος)唯一の目的は快樂なり、而して或る者は之れを刹那の感覺(ἡδονὴ ἐν κινήσει)と做し、他は永遠の快樂若しくは幸福(καθ' εὐδαιμονίαν)なりと觀たり。然るに、經驗は、人生が快樂よりも苦痛を與ふること大にして、眞の幸福は幻想に外ならざるを立證せり。是れに由りて、人生の目的は實現せらるゝことなく、又た實現し得ざるものなり。從つて、人生は何等の價値を有することなし。是に於て乎、死は生よりも寧ろ選む可きものと爲る。何となれば、死は少くも人類に取りて唯一可能なる幸福、即ち完全なる苦痛の制壓より成る消極的幸福を吾人に致すが故なり。(Cicero, Tuscul., I., 34: A malis mors abducit.)。斯くて快樂主義は Hegesias の哲學に於ける厭世主義と爲りて現れたり。ヘゲシアスはキレーネの Aristippus の後、四世代にして世に出で「死の鼓吹者」(Πεισιθάνατος)なる稱號を得たり(Diog. Laert., ii. 86.)。凡ゆる積極的快樂の滿足に絶望せる彼れは、其の著「飢饉に由る自殺」並びに其の講義中に於て、人生の禍難を叙して、强く、當時の人心を動し、爲めに亞歷山利亞の官憲をして、自殺の宣傳より生じつゝある危險を防止するが爲めに、彼れの講義を禁止するの已むなきを感知せしめたり(前揭 Cicero, Tusc., I. 34, 83, 4; Ploutarchos, De Amore Prolis, c. 5.)。彼れは幸福を以て到達し得ざるものと主張し、而して諸善を選むことよりも、寧ろ諸惡を避くるの勞務を賢人に强ひんとせり。斯くて彼れは一切の外部的事物に對して無關心なるに由りて、自己より苦痛及び快樂を除去するを以て、人生最高の目的と觀たり。ヘゲシアスは、何物と雖も其の固有の性質に於て快樂又たは苦痛なるに非ず、快樂又たは苦痛の發生するは、一方に於て、或る物の新奇又たは稀少、若しくは他方に於て之れを以て飽足するの事實に存するを理由として、這個一切の外界に對する無關心を是認せり。(Diog. Laert., ii. 94, 5.)。(Alfred Weber; History of Philosophy, trans. by Frank Thilly, 1900, pp. 72-3; Edward Zeller, Outlines of the History of Greek Philosophy, trans. by Sarah Frances Alleyne and Evelyn Abbott, 1905, pp. 125-6; Theodor Gomperz, Greek Thinkers, A History of Ancient Philosophy, vol. II, trans. by G. G. Berry, 1905, p. 221)。

然るに Antisthenes は德は德の爲に存す、德は凡ゆる吾人の行爲の唯一究竟の目的なり、德は至高の善なり、而して德のみ獨り善にして、不德のみ獨り惡なり、其の他一切のものは不善不惡の中性なりと觀たり。或る人に取りて本然（οἰκεῖον）なるもののみ獨り彼れに取りて善たるを得、（Diog. Laert. vi. 12.）而してそは獨り精神に於てのみ見出さる可きものなり（Xenophon, Symp. iv. 34. 34-43.）。其の他一切のもの、財產、名譽、自由、健康、人生其の者は彼れ等自體に於ては善に非ず、貧窮、恥辱、隷屬、病弱、死は其れ自體に於て惡に非ず、殊に快樂が善として看做され、又た勞働が惡として認めらるゝことを最も少なきものなり。何となれば、快樂が或る人を支配するの原則と爲るの時、そは彼れの破壞を誘致し、而して勞働は彼れを敎化して德に導くが故なり。アンチステニーズは自ら歡喜するよりも、寧ろ發狂する（μανείην μᾶλλον ἢ ἥδ-θείην）を選む可しと稱するの常なりき。彼れの流を汲めるキニク學派（Kynosarges の學園によりて名附けらる）は更らに進んで、快樂は惡なり、人間は凡ゆる物質的並びに心知的快樂をすら抛棄するに非ざれば、有德たること能はざるものなりと宣明し、心的敎養及び哲學其の者をさへ惡として拒否するに至れり。而してアンチステニーズ及び其の學徒に取りて典型たるものは Hercules の勤勞艱苦の生涯なりき。斯くて後年、羅馬のキニク學徒 Peregrinus はヘルクリースに倣ふの意志を以て、オリンピア祭に集へる群衆の前に自己を焚きて最後を遂げたり。彼れ及び羅馬に於ける同學徒の行狀に就きては Jacob Bernays の Lucian und die Kyniker mit einer Übersetzung der Schrift Lucian's "Über das Lebensende des Peregrinus(1879.)を參照す可し。

（前揭 Zeller, p. 119; Weber, pp. 73-4; Gomperz, p. 152.）。

四

キレーネ學派の後繼者にして、個人的快樂主義の徒使たると同時に、又た Democritus の原子說に養はれたる Epicurus はソヒストと等しく、實利の考量に基きて國家契約を締結せる利己的にして且つ相互鬪爭的なる個人の結合として社會を解釋せり。快樂主義の賢人は娑婆世界並びに結婚、家族生活、及び國家より脫離す可きものにして、而して氣分の平靜に於て最高頂に達し、名譽及び富に對する渴望を除去せる理性的及び感覺的精神的享樂生活は彼れが生活の理想なり。エピクーロスの謂ゆる幸福は單純且つ愼重なる生活を營むに在り。精神的富は無限なり、而して賢人は容易に取得し得る（εὐπόριστα）物を以て滿足す（Diog. Laert. x. 130, 144, 146; Stobaeus, Flor. xvii. 23.）。外界の富は有限なり、眞に富裕と爲るは所有の增加に非ずして、欲望の制限に在り。多數の富人は禍患より免るゝこと能はず。僅少を以て滿足せざるものは、總べてを以てして猶ほ滿足せざる可し。滿足せる貧窮は最大なる富なり（Usener, Epicurea, 1887, pp. 300-4.）。エピクーロスは感覺的衝動の制壓を要求することなく、又た豐裕なる生活の享樂を禁止せんとすることなきも、彼れは更らに一層熱心に、人は是れ等の物に自己を依賴せしむることなからしむ可きを主張するなり。要は用ゆること少なきに非ずして、求むること少なきに在り。人は生にすら絕對に執着す可きものに非ず。エピクーロスは自殺によりて堪へ難き窮厄より自己を撤去するを人間に許せり（彼れは斯くの如き窮厄の生ずること極めて稀れなりとの意見を有せりと雖も）。（Gustav Schmoller, Grundrisz

der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre, I, 1901, S. 78.; Zeller, The Stoics, Epicureans, and Sceptics, trans. by O. J. Reichel, p. 459.; Trever, A History of Greek Economic Thought, 1916, Zeller, Outlines, p. 266.)。

Zenonによりて創唱せられたるストア學派（其の名稱は彼れ等が集會の場所たる Στοὰ ποικίλη に出づ）は德を以て至高善と做せるキニク學派の流を傳くて、又た之れを超越し補足せり。人が神的宇宙に對するは、火花が熱火に對し、滴水の大洋に對すると同一なり。吾人が身體は普遍的物體の斷片なり、吾人が靈魂は世界的靈魂（πνεῦμα ἔνθερμον）より放射する溫暖なる氣息なり。若し一切の物は宇宙の諸法則に從ふものとせば、人のみ獨り其の理性に依りて彼れ等を知り、而して意識的に彼れ等に追隨するに適せるものなり。是に於て乎、自然と一致せる生活（ὁμολογουμένως τῇ φύσει ζῆν.）は一般に彼の徒の最高原則として看做さるゝなり。最も普遍なる自然の衝動は總べての動物に在りては自己保存なり、此の目的に資するもののみ獨り價値（ἀξία）を有し、而して其の幸福（εὐδαιμονία, εὔροια βίου）に貢獻することを得。是れに由りて合理的實在に取りては理性と一致せるもののみ惟り價値を有す、之に取りては德のみ惟り善なり、而して德に於てのみ必然何等其の以上の條件と關聯せしめらるゝことなき其の幸福は存するなり（德は αὐτάρκης πρὸς τὴν εὐδαιμονίαν なり）。之に反して唯一の惡は不德（κακία）なり。其の他一切のものは悉く其の價値を正しき用に依賴する不善不惡（ἀδιάφορον）のものなり。吾人の德性に影響せずることなき一切の事物よりする完全なる獨立、外界的關係及び肉體的條件よりの高揚、賢人の自足、並びにかの「貧民の哲學者」 Sinope の

Diogenes (Goettling, Diogenes der Kyniker oder die Philosophie des grieschischen Proletariats, 1851. 參照）の享有せるが如き、要望よりの自由は又たストア哲學の理想なりき。斯くて彼れ等は人間に對し、凡ゆる事情の下に於て、其の獨立を確保するが爲めに、生の自意的脫離（ἐξαγωγή）を許容せり。そは單に極度の苦惱を免れしむるのみならず、彼れ等は之れに於て道德的自由の最高貴なる維持を認めたるなり。そは或る人が生命を以て不善不惡なる事物中に認めたることを立證し、而して何時たりとも四圍の事情にして彼れが現世的生命の裡に殘存するよりも、寧ろ之れを解脫することが、却つて自然と一致す可きの觀あらしむる場合には、彼れは之れに訴ふることを是認せらる可き一手段たるなり。ヅエーノーンを首めとして Cleanthes, Eratosthenes, Antipater 及び其の他多數のストア學徒は斯くの如き手段を以て其の生涯を終れるなり (Zeller, Outlines, pp. 245, 251.; Weber, p. 144.)。

五

基督敎會が、事情の如何を問はず、普く自殺を以て罪惡と認めたるは周知の事實なりと雖、而も基督敎國民の間に於ける一般的情操は一定の場合に於て、斯敎の敎義を無視して、之れを讚美せんとせり。

斯くて中世に於て、Aquino の聖 Thomas は、自己の現體の保持を求むるは、凡ゆる本質の傾向なりと呼ぶと共に (Summa Theologica, Ia 2ae, qu. 94, art. 2.)、自殺は三個の理由に基きて、一切不法なることを斷乎として主張せり。第一、凡ゆるものは自然に自己を愛し、斯くて又た凡ゆるものは自然に自己を實在に於て保持し、而して其の出來得る限り、破壞的の働因に對して反抗す、而して是れに由りて、如何なる人に取り

ても、自殺は自然の偏向に反し、又た彼れが自己を愛す可き仁慈に反す。斯くて又た、自殺は自然法及び仁慈に反するを以て、常に重大なる罪惡なるが故なり。第二、總べて部分の存在は悉く全體の存在の一部なり、然も、凡ゆる人間は社會の一部なり、斯くて又た彼れの存在は社會の存在の一部なり、是れに由りて、彼れの自殺は社會に損害を加ふるが故なり。第三、生命は神に由りて人間に授與せられにる賜にして、生殺與奪は神の權域に屬す、而して是れに由りて、自己の生命を奪ふ者は神に背くの罪を犯すものなればなりと(Summa, 2a, 2ae, qu. 64, art. 5.)。

六

而して近世の始期に至り、人法は神法に背反す可きものに非ず、神は吾人自身をも、他人をも殺すの力を許與することなしと論じたる Sir Thomas More は、不治の患者にして、其の生存が單に彼れに取りて苦惱に過ぎざる時、僧侶と長官とは彼れを說きて、其の希望に由り、牢獄に等しき生命を脫離せしむるを得べきことを主張せり。然れども其の他の自殺者は正當なる葬儀を受く可きものに非ざるなり。此「無有鄕」篇中に表明せられたる所と幾分類似せる慣習は Massilia（今のマルセーユ）の希臘植民地に於て事實行はれたる所なりと謂ふ(Valerius Maximus, II. 6.) (Ritchie, p. 126. 拙著「經濟學史研究」（一九二〇年版）一二九——一三〇頁)。

之れを要するに、人生はより高き目的、即ち、道德的善行、義務の履行、德の爲めの德を認むる者に取りてのみ惟り眞の價値あるなり。換言すれば、人生は其れ自體に於て目的に非ずして、一の手段なりと思惟する者、即ち理想主義者に對してのみ惟り價値あるなり。彼れに取りては德は至高の善なり。而して德は惟り活ける實在によりてのみ實現せらるゝを得。斯くて、人生其の者は德、即ち至高善の手段にして且つ必須の條件たるを以て、相對の善にして、至高の善に非ずと觀せらるるなり。

（一九二〇年十二月）

新刊紹介

M. Beer:—History of British Socialism. Vol. I

London: G. Bell and Sons, Ltd.

物の生ずるは必ず因由あるに依る。Robertus, Marx 等の社會主義は Smith, Ricardo 等の所謂正統學派の經濟學と極めて密接な關係を有する。近世社會主義の思想的根源を探求する時は、遠く希臘羅馬の共產主義的思想を尋ねる必要があり、古代の ius naturale の思想は其の內容に於いて多少の變遷があつたとしても尙ほ近世に迄及んで居る。此の見地より見て M. Beer の近著「英國社會主義史」第一卷は極めて興味多き讀みものたるを失はぬ。云ふ迄もなく第一卷は第二卷を待つて始めて完璧たるべきものであるけれども、R. H. Tawney が本書の序言に云へるが如く這般の世界大戰の爲めに個々に發行されたのである。今や第二卷の刊行を見るに至り、Tawney の所謂「最も完全なる英國社會主義思想の發展の記錄」を有するに至つたのは學界の爲めに慶すべきことである。Beer はすでに獨文にて英國社會主義史を作つて居るが、彼自身の Preface に云ふところに依れば全然新に稿を起し、新しき材料に依つて增補したものである。

本書は全編を二つの部分に區別して居る。第一の部分は「中世共產主義」と題し、基督敎の共產主義的思想を簡單に論述し、次いで是が英國に及ぼせし影響に筆を起して、自然科學的傾向を有し來たりし近世の初期に終る。即ち此の部分は多少 Utopian Socialism の記述はあるけ